

V 考 察

1 柏崎市域の塚（群）について

柏崎市周辺は、県内でも最も塚（群）の集中する地域のひとつとして把握されていた（戸根 1979）が、昭和58年度に新潟県教育委員会が実施した遺跡分布調査によって、更に多くの塚が確認され、現在における塚総数は500基近く^(註1)に達している。特に集中して分布するのは市内東南部の北条地区で、塚総数の6割にも及んでいる。これに対し、沿岸部や平野部及び米山山麓一帯の鵜川西岸域では、塚の分布はほとんど認められず、言わば空白地帯となっている。こうした塚（群）の分布傾向は、分布調査の密度にも原因があると考えられ、必ずしも事実を反映したものとは言えないが、現段階におけるひとつの特徴として把握される。鵜川右岸の藤橋地区は、近在の半田地区とともに塚分布の小地域であり、分布圏の外殻に位置することになる。

これら塚（群）の立地としては、大半が丘陵の尾根筋先端付近や台地上に立地し、長岡市川袋の塚（寺崎 1981）や見附市三ツ塚（見附市教委 1984）のように沖積地、殊に水田内に立地する塚（群）はほとんど認められない。このうち最も多い事例は、馬の背状を呈した丘陵尾根筋あるいはその支尾根先端付近で、沖積平野に隣接した場所に構築されており、北条地区に所在する塚（群）のほとんどが相当する。また、段丘上の平坦地に立地するものは、柏崎平野南部に発達した中位段丘地域を中心とし、地域が限定されることもあって類例は少ないが、十三本塚（第3図7）等の特殊な塚群が立地している^(註3)。

このように、多くの塚（群）は、比較的景観のよい高台に立地することから、類似した立地条件を有する山城と有機的関連性を持つとする見解がある（戸根 前掲）。この論拠には、立地条件の他に分布形態や、戦国時代的感覚の伝承が多かったことなどが起因していると思われるが、これらを客観的に判断すれば、全てを山城と結合させて考える必要もないように感じられる。つまり、立地条件では、何故高台に多く築造しなければならなかったのかは、塚自体の本質的問題に触れ、現段階では不明としか言いようがないが、その理由として展望がきき、他所から見えなければならないという必要性や、少ない耕地を避けたためなどが考えられている。更に、沖積平野に面した位置にある場合が大半であることから、集落等を意識していた可能性が強い。また分布形態については、立地条件が類似することから、視覚的に表出された結果と考えられ、因果関係を積極的に説明することはできない。柏崎市周辺における塚の分布を見ても、確かに北条地区には北條城を中心にして鳥谷ノ城や広田城等があり、特に北條城下は城下町として発展していたことから、周辺に多く分布する塚と有機的関連性を有したかのように受け取れる。しかし、鵜川流域には越後守護上杉氏に深く関わる上條城や琵琶島城（平城）が所在するが、この地域は前述のようにほとんど塚の分布しない地域であって、塚との関係は認められないのである。更に、塚に付随した伝承にしても、それ自体は塚がどのような性質のもの

であるかを語ろうとするものであるが、それは今まで塚周辺で生活してきた人々が、塚をどう観念していたか、その感じ方を示すものであって、真実の説明とはならないのである（民俗学研究所編 1951）。

次に塚の存在形態について観ると、単独と群集の2つの形態があり、それぞれに意味をもっていたと考えられる。柏崎市域で確認された塚（群）は、71件である。このうち単独で存在するのは27件〔38.0%〕で、群集形態（複数で構成されるもの）の塚群との比率は、およそ2：3の割合である。県内には単独の塚が多いと言われる（戸根 1974）が、本地域にはあまり当てはまらないように感じられる。群集形態の塚群は、構築された塚の員数によって区分することが可能である。今仮に4段階に区分すると、小規模（2～4基）18件〔25.4%〕、中規模（5～10基）13件〔18.3%〕、大規模（11～30基）11件〔15.5%〕、特大規模（50基以上）2件〔2.8%〕となる。これらのうち3件以上のまとまりがあった員数ランクは、2基（11件）、3基（6件）、5基（5件）、8基（4件）、10基（3件）であった。^{（註4）}後世において一部の塚が破壊され、員数として計算されていないことも考慮する必要はあるが、塚群を構成する塚の基数は主にこの5例が中心であり、何らかの意味があったとも考えられる。但し、これが一般的なのか、本地域の特色なのかについては、対比すべき他地域の資料がなく、今後に期待したい。また地域の範囲も柏崎市域だけではなく、旧刈羽郡域程度まで拡大する必要があると考えられ、更にデーターを増やして行きたい。

塚の平面形としては、不整三角形を呈した特殊な例（寺崎 1978）もあるが、大半は方形と円形である。しかし、以前にも指摘したことがある（品田 1983）が、最近の県内における塚基底部分まで明確に調査した例では、その大半が方形を呈し、円形を呈するものは極稀な存在と言えるようである。^{（註5）}分布調査で確認される塚は、現状が山林であることが多く、更に塚表土を厚く腐葉土が覆ったり、降雨その他によって形状が変化した場合が考えられ、円形と誤認されるケースが多いのではないだろうか。柏崎市内における塚（群）の発掘調査例は少ないが、^{（註6）}国光の塚群（品田 前掲）例でも10基全てが方形となっている。

以上、柏崎市域に確認されている塚（群）に対し、分布、立地、存在形態、平面形態の4点について述べてきた。しかし、この4点のみに限ってもこれで十分であるとは言いきれず、更に多くの諸問題について言及して行かなければ、塚（群）を理解することはできないであろう。今後の発掘調査に当たっては、これら諸問題を見つめ、手懸りの少ない塚（群）に対し、少しでも多くのデーターを得るようにつとめたい。

註1 柏崎市域における遺跡数は、約600件余（但し、塚群中の各塚を1件として計数した場合）となるが、このうち塚は、約500基（83.3%）である。塚の地域別内訳は、最も集中する北条地区（長島川流域一帯）に約300基が集中して塚全体の62%を占め、圧倒的様相を呈する。これに次ぐ規模を有するのは、鵜川上流右岸の別俣地区で、約120基前後が確認されている。これは、水上の塚群が市内最大規模の100基前後を保有することの結果である。この他には、半田、藤橋、安田、中鯖石（鯖石川右岸部）、吉井、成沢等の各地区に10基前後から20基程度の小分布域が存在する。

註2 北条地区に塚（群）が多数確認されているのは、故品田定平氏の調査した結果であり、分布の精度とし

てはかなり高いものと言える。この反対に、米山山麓から海岸に至る柏崎市西部は、昭和58年度の分布調査でも対象外とされていた。

註3 所謂十三塚と称される塚群は、比較的平坦な地を選んで築造されたようで、このため開墾や農地の区画整備等で消滅する場合が多かったと考えられる（日本常民文化研究所編 1984）。

註4 なお、員数が11基以上と規模が大きくなると、類例が乏しくなるため、数値的まとまりはほとんど示していない。因に員数が10基以下で、1件の事例もない員数ランクは、7基と9基であり、逆説的意味があったのかも知れない。

註5 現在、塚の基底部を明確に検出した例は、20数例程が掲げられるが、それらはほとんど長岡市西部から柏崎に至る丘陵周辺に片寄っている。このため、限られた地域の特色とも考えられるが、20数例のうち円形とされるのは、長岡市中山1号塚（藤巻・波田野 1979）と刈羽郡西山町狐山塚群1号塚（戸根・竹田 1979）の2例のみである。しかし、前者は円形と推定はしているが、平面形測量図からは方形状とも受けとることができ、また後者についても楕円形状を呈して、保存状態は良好でなかった。

註6 市内で正式に発掘調査が実施された塚（群）は、向山の塚のほか、国光の塚群と半田の塚群がある。後者については、塚の形態を目的としていないものであったが、実見した所見では方形状がほとんどであり、測量図からもそれが窺える。

2 向山の塚について

向山の塚は、中位段丘上の平坦地に単独で築かれていた塚であった。しかし、塚に付属していたと考えられる遺物はなく、本塚を考察すべき手懸りは非常に少なかったと言える。本項では、先ず調査の結果をまとめ、築造目的等について推論を交えながら考察したい。

1) 調査のまとめと築造工程

向山の塚の平面形態は、方形を呈し、築造当初はかなり整った形態であったと考えられる。断面形は三角状もしくは半円形を呈し、台形とはならない。

塚の周囲を比較的規模の大きな周溝が巡り、周溝底における塚本体の規模は、一辺約6.70m、高さは約2.20mを計る。塚北辺の周溝外縁緩斜面において、中央からやや西寄りに浅いピットが存在し、覆土の観察から塚とは同時性を有するものと判断された。これは、国光の塚群10号塚でも類似したピットが検出されており（品田 1983）、築造目的に関連するか、何らかの祭祀等に使用された可能性もある。しかし、両者ともに遺物は出土しておらず、今後類例が増加することを期待したい。

更に、塚中央部に土坑状の遺構が検出されている。覆土は特徴的であり、有機物が埋設されるなどしたのち、腐蝕して消滅したような様相を呈している。人為的なものと判断されるが、古い木根の痕という可能性もあり、今回は指摘するのみとしたい。

次に盛土の状況等から、築造工程の一端を推定してみたい。先ず第1段階として、塚の場所を選定し、その周辺を含めて雑木等を除去し、塚の盛土範囲を区画したのと考えられる。第2段階は、塚盛土下部の築造である。塚区画外の周辺部から表土と地山土の混合土（偶然的混合土=O_c層）を区画内の表土上に平均となるように盛土する。次に同じ範囲か、それより若干広い範囲からO_d層を盛土する作業を行ったと考えられる。この時に「モッコ」等が使用されたと思われる、O_d層中にはその痕跡が顕著に観察される。第3段階は、周溝の掘削を行うもので、

その掘削土（O_e層）を利用して塚上部を形成する。しかし、掘削土全てを利用したものではないようである。そして、塚の中央部付近に土坑を掘り、何かを埋設したことが考えられる。第4段階は、塚頂部に黒褐色土（O_a層）を盛り、一応塚の外面的形態は完成したことになり、若干の整形等を行ったと考えられる。第5段階目として、塚頂部にスギを植え、周溝北辺に浅いピットを掘り凹めたと考えられる。第4段階に盛土した黒褐色土は、このスギを植えるための前工作であった可能性が強い。こうして完成した塚は、大きな凹みのように見える周溝の中央にそびえ、壮観だったのではないだろうか。

この向山の塚を築造した時期は、同時性を有する遺物が出土しなかったことから、不明ではある。しかし、盛土中から出土した陶磁器片から、江戸時代中期以降に築造されたと考えられる。そして塚頂部のスギは、最底でも100年以上は経たものであるため、その下限は江戸時代後期と判断される。

2) 築造目的等について

向山の塚は、何の目的をもって造営されたのか、調査によってもこの問題を解く資料をほとんど得ることができなかった。しかし、だからと言って不明と簡単に処理してしまえば、意味のないことになってしまう。本塚を調査の結果から観ると、比較的企画性を有したもので、盛土や周溝掘削のために移動せられた土砂の量は、かなり多かったと考えられる。とすれば、1人や2人の作業ではなく、もっと人数を要しただろうことは、容易に理解される。このような作業を無意味にするはずはなく、ある必要性によって造営されたことが窺えるのである。本項では、塚を取り巻く諸属性を抽出しながら検討し、本塚を造営した意図について考察したい。

先ず最初に、向山の塚における立地条件や景観等から検討したい。本塚は、磁北等に左右されて設定された可能性が薄いことについては、外部形態の項で述べた。それでは、何かの対象があって、塚の正面あるいは裏面をその方角に向ける必要があったことが考えられる。塚の南西面方向には、小さな沢状の谷が、やはり南西に向かって開口している。そして、その方角には米山が位置し、本塚頂部から小谷を通して眺望することができる（図版1-2）。米山は、米山薬師とも称されて山頂には石塔等があり、本地方では広く信仰の対象となっている。このことから向山の塚は、米山の薬師信仰に関係し、純粋な信仰のために造営された可能性がある。しかし、薬師信仰にあたっては、塚を築くよりも石塔を設けるほうが一般的であり、本塚周辺からは、それに類するものは認められなかった。更に、信仰上何らかの供物（古銭等）があったと考えられるが、それを示す資料は出土していない。また、本塚頂部から米山を望むことができたのは、周辺の木々を伐採した結果であり、築造当時の景観を復元できないにしても、無理であった可能性が強いだろう。以上のことから、現在の視点ではあるが、米山に関する薬師信仰に係るものとするには消極的にならざるを得ないと思われる。

それでは、次に向山の塚に立ち返って考察してみたい。本塚は、表層を腐葉土等で覆われ、更にスギや雑木が茂っていた。スギは、塚周辺にマツとともに比較的多く認められ、塚盛土上にも樹齢10～30年程のものが数本認められた。また、塚頂部のやや東側には、7回以上も伐採

された痕跡を残す大株があり、古い切口は既に腐蝕していた。このスギは、俗に「クマスギ」^(註7)と呼ばれるものであるという。普通のスギは、幹を切断されれば、そのまま枯れてしまうのに対し、このクマスギは根が強く、切株の一部から再生し、新たな幹を生成させるという。このため、何百年と生き続け、また何かの原因によって幹が折れたり、あるいは切断されると、その都度株も大きくなり、形も異様となる。このスギの性質は、遺伝的なもので、1本のクマスギを識別できれば選択することは容易であり、社寺等に多く植えられている。確かに塚周辺には、所謂クマスギと称されるスギは皆無であり、本塚頂部に存在する1本のみであった。このクマスギは、意識的に本塚に植えられたものと考えられる。

また、向山の塚が位置する場所は、横山、軽井川、半田（100数十m程隔たる）、そして藤橋の4大字界が接するところであった。向山の塚が築造された年代は、江戸時代中期から後期に至る頃と推定したが、塚頂部にあったクマスギは、伐採関係者によれば樹齢200年前後だろうとされること^(註8)から、およそ18世紀代が考えられる。この時期における支配領域をみると、宝永7（1710）年以降では、横山、藤橋は高田藩に属したの^(註9)に対し、軽井川、半田は幕領であった（新沢 1970）。

向山の塚は、クマスギを例にとっても明らかに目印を意図としたと考えられ、更に大字界等^(註10)が接することから、「標（しるし）」（波田野 1979）的意味をもった「境塚」である可能性が最も強いと考えられる。以下、向山の塚を境塚と仮定し、その意義等に若干触れてみたい。

境あるいは境界は、時間的境界（通過儀礼等）と空間的境界（地理的なものなど）とに区分することができる。本項は、当然後者の考えであるが、これも幾つかの段階に観念される。その第1は、生活圏の境であり、第2は家と外の境、第3は自分の身体と外界との境となり、境界意識には、この3段階が重層的に存在することになる（小泉 1985）。境塚を対象とした場合は、第1の境界意識ということになるが、これも幾段階かに区分することができる。向山の塚では、支配者階級等が意識した厳密な境界（行政区画等）と、藤橋地区を主体としたムラ境の2者が考えられる。

先ず前者について検討すると、鎌倉時代において下地中分が急速に増加し、領主と地頭との争いが生じたため、境塚を造営したという論があるということなどから（池田 1984）江戸時代と推定される本塚についても可能性を指摘できる。殊に、向山の塚が位置するところは、高田藩領と幕領とが互いに接し、しかも本塚が、藤橋地区にあって横山寄りであることから、両者がともに幕領を意識していたように考えられる。この場合、塚築造の主体者は、高田藩主等となり、命令された村人等がその作業に従事したことが想定される。とすれば、現在信仰等の脈絡や伝承が付随せずともよいわけである。しかし、領主等の命令等であれば何らかの文書等が残る可能性があるのに類例もなく、また領域境界の標とした場合、境界線上に塚を設定するのが妥当と考えられるが、本例は異っている。以上のことから、藩領対幕領的に理解することには無理があるように考えられる。

それでは次に、後者のムラ境を意識して築造された場合について検討する。普通民俗学で言

うところのムラ境は、心理的なムラ境であり、必ずしも現実の大字界とは符合しないことが多い（民俗学研究所編 1951）。そして具体的には川、橋、峠、辻、三叉路等が生活圏における境として意識される。このような境には、「地藏尊や馬頭観音、庚申塔、二十三夜塔などの石塔や、庚申塚などの塚のある場合も非常に多く、中でも道祖神を祀っている例が多い」（民俗学研究所編 前掲）という。向山の塚が位置するところは、普通に認識するムラ境よりも遠いというニュアンスが強い。しかし、この場所は横山から半田あるいは下軽井川に至る古道が通り、更に藤橋からその古道に接続する道とで三叉路を呈し、しかも地形的には峠に近い場所であった（第4図）。これらのことからムラ境のひとつと認識され、何らかの境界神が祀られていた可能性が考えられる。あるいは、クマスギはその神の宿る神木であったとも考えられる。但し、藤橋地区に伝承すら残されておらず、また祭祀の痕跡を明確に検出できなかったことは、本論の展開に無理を伴っていると考えられる。しかし、塚を築くことはしたけれど、場所が集落から若干遠く、田畑も少ないことから早くに廃れてしまった可能性もあり、現段階における理解とすることはできるだろう。

註7 「クマスギ」については、向山の塚周辺の伐採を担当した関係者から教示を受けたもので、藤橋地区内では特別に意識していなかったようである。

註8 この「クマスギ」に痕されていた切口は、7ヶ所以上が認められ、樹齢20～30年前後のものであり、このスギの性質が話のとおりであれば、樹齢200年前後も根拠がないわけではない。

註9 宝永7（1710）年に松平定重が高田藩に移封された際に、横山、藤橋等は、高田藩の封に入った。この後寛保元（1741）年に松平定賢が白河藩に、また文政6（1823）年に松平定永が桑名藩に移封されて明治維新を迎えるが、各々飛地領として継続され、松平越中守に支配され続けた。なお、今回は一括して高田藩と記した。また半田、軽井川は明治維新まで幕領であった。

註10 おそらく「境塚」と称しても、その目的あるいは内容と言ったことは多様であり、分類していく必要があると考えられる。しかし、現状ではそこまでには至っておらず明らかにすることはできない。

3 まとめにかえて

向山の塚について、境塚のひとつと仮定し、その意味についても若干触れて考察した。しかし、これで向山の塚が理解できたことにはならず、ひとつの仮説が提示されたと言うべきであろう。塚（群）の研究は、発掘しても遺物を検出することは稀であったり、伝承や記録がない場合が多く研究する側にとっては厄介なものとなっている。このような現状をなるべく前進するようにと、考察したのであるが、やはり根拠の乏しいものとなってしまった。今後は新しい資料が増加するのを待ちながら、諸々の視点から検討して行きたい。

なお、塚研究は、特殊な塚に対するものが多いが、最近塚に関わる論述が増えてきたようである。その中で、中村孝三郎氏による塚編年案が提示され（池田 1984）、大いなる一歩を踏み出したように思われる。しかし、塚（群）の内容は、一元的に展開するというよりも、かなり多様性を含み、複雑ではないかと思われる。塚自体の発掘調査において、詳細なデーターを積み重ねて行くことが、もう少し必要のように感じられる。